

第2章

途上国障害者の生計研究のための調査法開発: 生態人類学と「障害の社会モデル」の接近

亀井伸孝

要旨:

開発途上国の障害をもつ人びとの生計の実態を明らかにするとともに、その人間開発のプロセスに障壁をもたらす社会的要因の除去と、利用可能な資源の開発を提言するためには、現地調査にもとづいた実証的研究が必要である。ただし、障害の要因を社会環境に求めようとする「障害の社会モデル」を前提とした調査を立案、実行しようとする場合、個人や集団の生活と生計に障壁をもたらすと考えられる要因があまりに多岐にわたりすぎるため、質問紙の調査項目の数がかぎりなく増加していくなどの問題を抱えこむこととなる。本論では、これまで障害の分野とは関わりが薄かった生態人類学(人間と自然環境・資源との関わりを明らかにする人類学の一分野)の概要を紹介しつつ、この分野が「障害と開発」研究と多くの共通点をもつことを指摘する。そして、「障害の社会モデル」が視野に入れようとする多様な社会的要因を、調査対象者の生活様態に即した形で効率よく分析するにあたり、生態人類学の調査法が有効な手段となりうることを示す。途上国の障害者の生計研究において生態人類学的アプローチがなしうる寄与と課題をまとめ、各種の調査法の長所を活用する効果的な組み合わせ方についても検討する。

キーワード:

生態人類学、障害の社会モデル、調査法、参与観察、計量的手法

第1節 はじめに：障害観の転換と調査法

障害をめぐる研究や福祉実践の分野では、「障害の医療モデル」から「障害の社会モデル」への転換が唱えられており、国際開発研究においてもこの潮流が大きな変化をもたらしている（森編[2008]）。本論は、この転換点に際し、「障害と開発」分野における新しい調査法の確立の必要性を論じようとする試論である。

本アジア経済研究所では、2005～2007年にかけて研究会「開発問題と福祉問題の相互接近：障害を中心に」が行われた（森編[2008]）。この研究会の大きな目的のひとつとして、開発を直接的に論じる前に「障害」をめぐる認識を明らかにしておくことがあった。ある個人が人生の選択肢を拡大しようとする（人間開発を達成しようとする）にあたり、それが阻害されている現状があるとすれば、開発はその阻害要因をどこに求め、何を除去しようとするのかを定める必要があるからである。

すでに論じた通り（亀井[2008]）、「障害の医療モデル」は、その阻害要因を個人の身体の中に求め、それらを除去することを想定してきた。つまり、人間開発を阻害するのは個人の身体に内在する機能欠損や能力低下などであり、それらを治療、予防などによって除去することで人間開発を実現しようとするものである。

一方、「障害の社会モデル」はこの発想を転換させ、人間開発の阻害要因を個人の身体の外に求め、それらを除去することを想定する。つまり、人間開発を阻害するのは個人の身体の外側に分布する、身体機能と親和的でない各種要因（設備、制度、資源分布、情報など）に由来する障壁であり、それら障壁を改変、除去することにより人間開発を実現しようとする。その結果、治療や予防よりも、交通・公共施設のバリアフリー化や、情報保障、雇用促進など、円滑な社会資源利用のための措置を講じることが検討される。

さらに、筆者はこの「障害の社会モデル」のひとつの延長型として、「障害の集団モデル」を提唱した。障害の社会モデルが、おもに個人による環境利

用とその阻害要因除去を想定してきたのに対し、個人単位よりも集団単位で人間開発を企図する方が適している状況における開発のモデルとして示されたものである。たとえば、手話という自然言語を共有する言語集団を形成しているろう者において開発を検討する際、「耳が聞こえない個人」という単位で社会モデルを適用するのではなく、「手話言語集団」という集まりを一つの単位として社会モデルを用い、そのエンパワーメントを考えることが重要であると論じた（亀井[2008]）。このモデルの有効性を、アフリカのろう者と手話言語に関する民族誌的事実（亀井[2006]）に基づいて例証した。

このアフリカにおけるろう者と開発をめぐる調査は、筆者による手話言語集団への長期参与観察という文化人類学的な手法により行われた。文化人類学的な調査法が開発研究・実践に寄与しうることについてはすでに論じられているが（ノラン[2007]など）、「障害と開発」をめぐる議論の中では十分に論じられていない。ただし、この調査法をめぐる問題は、上記で概観した障害観の転換とも本質的に大きな関わりをもっていると考えられる。

本論は、この前期研究会の成果を生み出す過程において直面した、調査法をめぐる問題に焦点を当てる。途上国の障害をもつ人びとの生計研究を進めるにあたり、調査法の検討は避けて通ることができないという認識のもと、方法をめぐる提起を行うことを目的とする。なお、本論では「途上国障害者の生計研究」を「開発途上国の障害をもつ人びとの生計の実態を明らかにするとともに、その人間開発のプロセスに障壁をもたらす社会的要因の除去と、利用可能な資源の開発を提言すること」と定義する。

第2節 障害の社会モデルが抱えた課題

前節で述べた通り、障害をめぐる議論は「社会モデル」（「集団モデル」を含む）へと転換する潮流にあるが、社会モデルを採用することに伴ってこの分野が抱えた困難さにも目を向ける必要があるであろう。途上国の障害をもつ人びとの生計の実態とそれに関わる障壁や資源に関して明らかにするため

には、現地調査にもとづいた実証的研究が必要であるが、その調査の遂行の上で大きな問題が生じるのである。

障害の社会モデルは、画期的であるだけに、一種の「過激さ」をそなえている。社会モデルは、ある個人における人間開発を妨げる要因を、その人の身体的特徴にではなく環境の側に求めようとするため、いわば個人をとりまく環境要因すべてが潜在的な調査対象となり、分析すべき対象が限りなく増えていくという事態を招くモデルでもある。極言すれば、あらゆることが「問題」になりえてしまうという事態を理念的に抱え込むこととなった。たとえば、朝だれかに会って「おはよう」と声をかけることは、一見何の問題も生じえない日常的所作であると思われるが、厳密に言えば、耳が聞こえ、かつ同じ言語を習得している人びとの間でのみ通用する日常行為である。耳が聞こえない人にとっては、何か話しかけられているにも関わらず情報が伝わってこない、ひとつの障壁を突きつけられていることにほかならない。歯ブラシ一本、道を歩く犬一頭、また訪問先で出される一杯のコーヒーすら、その事物と身体的に親和的でない個人や集団にとっては、社会的にもたらされる障壁となりうる。研究の中に社会モデルを導入することとは、そのような可能性を引き受ける覚悟が要請されることである。

さらに事態を困難にするのは、社会モデルが、障害以外の個人の属性も欠かせない重要なファクターとして要請することである。たとえば、身体機能としては同じいどに耳が聞こえない人であっても、手話を話す人か、音声言語を話す人かによって社会環境はまったく異なったものとなり、本人にとって何が有用な社会資源となり、逆に何が障壁となるのかが異なってくる。手話を話す聞こえない人たちにとって手話通訳サービスはきわめて有用な資源であるが、手話を知らない聞こえない人に対してこれを用意しても、何ら利用価値が見出されないことであろう。また、後述するように、手話通訳が用意されたところで、ろう者が話すのとは異なる手話言語で通訳が行われた場合、本人たちにはまるで益をもたらさない結果を招く。

このような個人の属性を形作る要素として、その人の失聴年齢、言語経験

(手話／音声言語)、教育歴、家族の言語 (手話／音声言語)、学校の言語 (手話／音声言語) などのファクターが関わってくる。なお、アフリカなどの多くの途上国では、音声言語と言っても、英語などの公用語と地域固有の民族諸語が併用されているケースが多く、手話も地域の手話のみでなく、欧米などの外來手話言語が導入されてろう学校で教えられているケースがある。障害の社会モデルは、これらをすべて分析対象と位置づけることとなる。こうした個人の属性の多様性に、無数の社会的環境要因が加わることで、その組み合わせとしての生活様態のヴァリエーションはどれほど生じることであろうか。

このような事態を念頭に置いた場合、障害者統計は何を語りうるかということ再検討しなければならないであろう。たとえば、カメルーン共和国で1984-1985年に行われた障害者人口のデータがある (Ministère des Affaires Sociales, République du Cameroun [2006: 5])。それによると、すべての種別をあわせて全国に92,128人の障害者がいるとされている (調査の基準や精度についてはここではふれない)。それは医療モデルに基づいたデータであり、個々の人や集団の属性およびその社会環境を含めた生活様態を捉えたものではなく、さらに社会環境のどの障壁を除去すべきかを指し示すものでもない。医療モデルに基づく人口統計は、先に述べた無数の個人・集団属性および社会環境要因の組み合わせによって生じる生活様態のヴァリエーションの迷宮に入り込んでいく入り口にすぎないのである。

「障害の社会モデル」を前提とした質問紙での調査を立案、実行しようとする時、個人や集団の生活と生計に障壁をもたらすと考えられる要因があまりに多岐にわたりすぎるがゆえに、質問紙の調査項目の数がかぎりなく増加していくことは明らかであろう。仮に電話帳のように分厚い質問紙を用意したところで、それで現実の複雑さに十分対処できるものと言えるであろうか。また、調査者が想定していなかった事象を取りこぼすおそれ、語りによる回答の信頼性の問題など、課題は多く存在する。

ところで、調査者がアプローチの方法に苦心する一方で、調査対象となる

生活者本人が無数の障害要因に立ちまはだかれて屈服しているわけではなく、日常生活の中で無数の社会的要因を前に行動選択不能の状態に陥っているわけでもない。現状の身体と所与の社会環境の中で利用可能な資源を取捨選択し、あるいは障壁を回避したりしながら実際の生活を営んでいる。あらかじめ用意された質問紙の調査項目にそって写し取ることは技術的に難しい、このような日常的な営為を把握することが、社会モデルの理念に沿った理解のあり方ではないであろうか。

そこで以下では、これまで障害の分野とは関わりが薄かった「生態人類学」という分野の概要を紹介し、この分野が「障害と開発」研究と多くの共通点をもつことに着目する。そして、その調査法の「障害の社会モデル」への応用可能性をうかがってみたい。

第3節 生態人類学とその調査法

生態人類学とは「人間の生活に着目し環境への適応およびその進化を研究する人類学の一分野」である。その中心テーマは「生業を軸とし生物学的・社会文化的諸特性と有機的に関連づけながら人間-環境関係を具体的に解明すること」にある（石川ほか編[1994: 414-415]）。

生態人類学は、霊長類学、文化人類学、考古学などの影響のもとに成立し、生態学などの自然科学的な側面と、文化人類学などの人文・社会科学的な側面の両方を兼ねそなえた分野である。日本でも、1960年代からのブッシュマン研究などを先駆けとし（田中[1971]ほか）、アフリカ、中南米、オセアニアの狩猟採集民、牧畜民、農耕民など、自然に強く依拠して暮らす人たちの社会に関する研究が盛んに取り組まれてきた。最近では、これらを「孤立した人間-生態系」としてのみ捉えるのではなく「市場経済などのより広い社会のシステム」と関係づけても論じられており（秋道ほか編[1995: 10]）、経済学や開発研究、同時代の環境政策をめぐる議論などとの接点も増えている。

方法上の特色としては、「自然と人間との関係を基調にした全体論的アプロ

一チ」(秋道ほか編[1995: 10])があり、とりわけ「自然科学の方法と社会科学の方法を組み合わせる」(秋道ほか編[1995: 5-6])ことが行われてきた。その代表的なものが、参与観察と、直接観察に根ざした徹底した計量的手法の活用である。

以下では、生態人類学の調査法の特徴を見るために、日本におけるその研究拠点の一つである京都大学における手法の事例を紹介する。京都大学は霊長類学の世界的拠点として知られている一方、今西錦司、梅棹忠夫、伊谷純一郎らが早くから動物生態学の知識と方法を応用する形で自然環境の中に暮らす人びとの調査を行い、特色ある生態人類学の学風を築いてきたことでも知られている(今西[1948]、梅棹[1955]、伊谷・原子編[1977]など)。

調査法の一つ目の特徴は、調査者自身による参与観察が何よりも重視されることである。とりわけ、調査者による直接体験が重要であることがしばしば強調される。たとえば、熱帯雨林の狩猟採集民の調査を行う時は、自らが森の中のキャンプに寝泊まりして狩猟や採集のチームに参加し、生活と生業をともしながら調査することが推奨されてきた。また、研究会などで食文化に関わる報告を行う学生に対しては、必ず「それを自分で食べたかどうか」を確かめる質問が投げかけられた。つまり、調査対象となる人びとの環境・資源利用に関し、研究者は第三者として情報を収集するのみでなく、自身が資源利用者の一人となってその立場に身を置くことが勧められる。そのことで、集団とその文化における内在的な視点で自然環境と人間との関わりを捉える契機とすることができる。これは、障害をもつ個人や集団において内在的な視点により環境とその利用実態を学ぼうとする「障害の社会モデル」研究に有益な示唆をもたらすであろう。

二つ目の特徴は、直接観察に基づいた計量的手法に重きを置いた調査を重視することである。家畜の頭数、焼畑の面積、住民の人数、収穫物の重量など、あらゆるカテゴリーの事象を数量で捉えることを強く勧められる。京都大学では「動くものは数えよ、止まっているものは測れ」という標語が先輩から後輩へと語り継がれ、論文執筆や研究会発表では、必ず自分の目で観察

した事象を量的なデータとともに報告することが求められてきた。現地長期滞在における参与観察という文化人類学的方法を基本としながらも、必ずしもそれは主として叙述に基づいて行われる質的研究とは言えず、むしろ事象の量的把握に力が注がれてきたという意味では、きわめて定量的研究の性格が強い分野である。これは、本研究会が目指す障害者の生計研究にあたって重要な貢献をする特徴であろう。

このような二つの特徴をそなえた調査法の利点をまとめたい。一点目に、多様な環境要因の中から、調査対象者の生活様態に即した重要な要因のみを効率よく抽出することができる（長所1）。二点目に、数値データにより量的な把握をすることができ、語りによるバイアスを除くことができる（長所2）。三点目に、調査者にとって想定外の事態が生じて、その現場で記録するという形で対処し、把握することができる（長所3）。

筆者は、かつてこの手法により、熱帯雨林に暮らす狩猟採集民の子どもたちの生業活動と日常行動に関する長期フィールドワーク調査を行った（亀井[2001; 2002]; Kamei[2005]）。5-15歳の年齢層にある子どもたちが、狩猟採集活動を通して居住集団の生計にどのような寄与をしているかを、子ども集団への参与観察と量的データの収集により把握し、大人とは異なる資源利用や環境認識、労働力としての貢献の実態を明らかにした。その手法は、「教え育てられる存在」という認識とは異なった形で子どもを捉えることを可能とした。

その後、アフリカのろう者と手話言語を主題とする文化人類学／言語人類学的研究をあわせて手がけるようになったが、このテーマにおいても上記で述べた参与観察と直接観察に基づく計量的手法が有効に活用された。このような手法が実際にどのように役に立ったのか、次節でいくつかのエピソードとともにまとめてみたい。

第4節 生態人類学的アプローチの活用

本節で紹介するのは、いずれも 2002 年から 2007 年の間に、西・中部アフリカの諸国（カメルーン、ガボン、ベナン、ガーナ、ナイジェリア）で、ろう者と手話言語に関する人類学的な調査を行っていた時の事例である。なお、ここでは障害の社会モデルと調査法の問題を分析するため、生計のテーマに限定せず、広く障害をもつ個人・集団と社会環境の関わりに関わる事例を取り上げて紹介している。

1. 長所 1: 重要要因の抽出

【事例 1-a】 ジェスチャーの多い印刷屋

ろう者の青年とともに印刷屋に行き、コピーサービスを利用した。印刷屋の店員は手話ができないが、お互い顔なじみなのであろう、二人で指をいくつか立ててジェスチャーで延々と会話をする。青年はさらに値引き交渉まで成功させ、無事に仕事を終えて店を出た。「ここのお店の腕はいい。よく来るんだ」

手話を話す耳が聞こえないろう者にとって、町に行く手話を話さない音声言語の話者たちは、みな「何を言っているのか分からない他者＝障壁」にほかならない。しかし、実際にろう者とともに生活したり行動したりしていると、声のみで話す人よりも、ジェスチャーを豊かにまじえて話す人の方が理解しやすく、さらには手話を話せる人の方がよい、という序列をもって人びとを見ている様子が分かる。この店での仕事ぶりを見ていると、ジェスチャーをまじえてろう者を客として受け入れる店員がいることが、ろう者が仕事をする上で重要な資源となっていることが見てとれる。仮に質問紙などの調査で「あなたの仕事上の取引先の店員は手話ができますか」と問うたら「できない」と回答され、資源としての利用価値はゼロとの結論が導かれるかもしれない。一方、現場でははるかに柔軟な資源利用の姿を見ることができる。

【事例 1-b】 物乞いと思われた画家

あるろう者の画家が、集会で怒りの報告をする。自分はプロの画家として、企業の事務所を営業で回っていた。ところがある企業を訪れたとき、対応者は耳が聞こえない自分のことを「物乞いだ」と思い込み、小銭を放ってよこした。怒ってそれを断り、帰ってきた。

この挿話は直接観察に基づくものではないが（筆者は、この「物乞いあつかい」の現場を見ていない）、筆者がろう者団体の集会に参加していた時に見た発言の一部を要約したものである。マジョリティであり、かつしばしば社会資源を占有していることの多い非障害者の固定観念が、ろう者の生計活動に制約をもたらす障壁となっていることを示している。また、その地域で障害をもつ人たちにどのようなレッテルが貼られ、ろう者の労働をいかに阻害しているかを、具体的に見ることができる。ろう者どうしが集まって手話で本心を語り合う集会の場であればこそ、このような体験談が紹介され、調査者が手話で行われる会話の場に参与してこそ、怒りも含む本音と出会うことができるものと思われる。彼の営業活動に同行して調査すれば、実態はさらに実証的に明らかにされるかもしれない。

2. 長所 2: 量的な把握

【事例 2-a】 不明瞭な仕事の時間帯

あるろう者の青年は「平日は毎日仕事です」と言う。それにもかかわらず、ある平日、「今日は昼に友人に会いに行ってきた」と言う。

障害者の就労実態を知るために聞き取りを行うと、おおむね「仕事は月曜から金曜まで、時間は〇時から〇時まで」といった回答がなされるが、実態はその回答通りでないことがしばしばある。これは、語りが正確な実態を伝えていない事例である。また、調査地によっては、社会の一般的慣行として定時労働の規範が遵守されていないケースもある。さらに、農村の障害者など、その日の天候や日照時間帯によって労働の状況が定まるという生業をも

つ人たちに対し、曜日や時間で実態を尋ねることはほぼ意味がない。このような場合、調査者が直接観察を行って労働の開始と終了の時刻を記録するのが、もっとも簡便かつ確実な方法である。また、途上国には数多くいる農村の障害者であれば、一概に「農耕」あるいは「狩猟採集」と述べたところで、その実際の作業の内実は多岐にわたる。障害をもつ人たちは、どのような活動にどのくらいの時間を費やし、どれほどの収入またはカロリーを得るのか、それらの量的把握のためには生態人類学の手法が効果的である。

【事例 2-b】 聞くと見るとで大違い

「人がたくさん集まるよ」「〇人はいる」。会合に実際に同行して人数を数えてみると、語りより少なかった。

観察による量的把握は、語りにおけるバイアスを除去できるという利点もある。聞き取り調査の場合、何かの実数をはっきり把握していないか、または過大評価で申告することがある。団体活動の実態調査などにおいては、会合に参加した上で、来場者の人数を男性／女性、大人／子どもなどのカテゴリー別に数えることで、その集まりの実態を正確な量的データとともに記録することができる。また、農村で暮らす障害をもつ人の社会関係や日課、生業、収支などを明らかにする際も、直接観察に基づく計量的手法によれば、信頼に足る量的データを得ることができるだろう。それは、何らかの量を調査対象者が多く（または少なく）見積もって報告するというリスクを避けることでもある。

3. 長所 3: 想定外の事態への対処

【事例 3-a】 書きことばが違う！

ろう者たちによって手話で営まれている日曜日のキリスト教の礼拝のできごとである。礼拝に参加した一部のろう者は英語圏で、一部はフランス語圏で教育を受けてきたため、板書する言語が人により異なるという事態が生

じた。両言語を読み書きできるろう者が翻訳しながら、話を進めた。

【事例 3-b】理解できない手話通訳

ろう者たちが参加者の大多数を占める集会（手話を使用言語として進行する）で、ゲストである耳の聞こえる人が音声でスピーチをした。一人の手話通訳者が音声から手話に通訳したが、ろう者の大部分は通訳されたその手話を理解できなかった。なぜなら、この手話通訳者が学習したのはフランス手話であって、この町のろう者たちの多くが話している手話ではなかったからである。急きょ、両方の手話を理解できるろう者が間に入り、二つの手話の間で通訳をした。

ろう者たちの生活の現場では、調査者が想定していなかったさまざまな障壁に出会うことがある。二つの事例は、書きことばや手話言語の違いによってろう者たちが直面した障壁であり、それぞれの背景には教育政策や手話通訳者育成のあり方という言語や文化にまつわる社会的要因が深く関わっている。ただし、開発一般の議論において言語・文化的差異が注目されている一方（国連開発計画[2004]）、「障害と開発」をめぐる議論では重視されてこなかったため、質問紙の調査項目には反映されにくい事象であろう。たとえば「集会に手話通訳が用意されている／いない」というような調査項目では、このろう者たちの抱いた困惑をすくいとることができないはずである。参与観察では、そのような想定外の事態をも柔軟に記録することができる。

人と自然環境／資源との関わりを明らかにする生態人類学は、参与観察および直接観察に基づく計量的手法を特徴とし、複雑きわまりない環境条件の中で、さまざまな資源を利用して生活する人間集団の特性を明らかにしてきた。この手法が、「障害の社会モデル」における複雑きわまりない社会環境を分析する際の有用なメスとなりうるのである。

第5節 生態人類学と「障害の社会モデル」の接近

生態人類学と、社会モデルに基づく障害研究の特徴を、表にまとめた（後掲）。それぞれの研究の成立背景や関連分野はまったく異なりながらも、複雑きわまりない環境要因の分析に取り組むことで、特定の人間（集団）における固有の生活様態を明らかにし、そこから問題解決のための示唆を得ようとする点で、両者はきわめてよく似ている。生態人類学は、「障害の社会モデル」という無限の事象を対象としてあつかう必要に迫られている分野における有効な調査法を提示するであろう。

このような発想と手法に基づいて、すでにいくつかの興味深い調査が途上国において試みられている。内藤は、チリの都市貧困層の障害児と家族に関する参与観察を行い、日本が援助で導入しようとしたリハビリテーション技術が現地の社会環境に適していないことに伴って生じたコンフリクトの事例などを明らかにした（内藤[2003;2008]）。また、戸田は、カメルーンの熱帯雨林の農村に住み込んで身体障害者の日常生活調査を行い、農村に暮らす障害者の日課、社会関係、生業活動などを量的データとともに記録することを進めている（戸田[私信]）。これらの調査の特徴は、開発による改善を視野に入れつつも、まず長期参与観察によって生活様態それ自体を理解することを念頭に置いていることである。研究者が、途上国における障害をもつ人びとの生活様態を第一義的に「問題」としてではなく「日常」として把握、記述し、その中からその地域・集団固有の問題群を明らかにすることで開発に提言を行おうとする学的潮流が育まれつつあることを示しているであろう。

生態人類学と、社会モデルに基づく障害研究には、いくつかの相違点もある。たとえば、生態人類学は人間集団における環境・資源利用の文化を集合的に記載する傾向があるのに対し、障害研究においては個人における環境・資源利用や障壁に注目するケースが多い（ただし、ろう者のように集合的に記載する必要性をもつ人びともいることは冒頭で述べた）。また、生態人類学が環境の中のポジティブな資源利用により関心を向けるのに対し、障害研究は個人や集団にとり障壁となるネガティブな要因の除去に関心を寄せる傾向

がある。それとも関連し、生態人類学よりも障害研究の方が、具体的な問題解決のための提言と実践に大きな比重が置かれている。こうした違いこそあれ、環境との関わりにおいて人間を捉えようとする両者のまなざしは同じ方向を向いており、その対話はきわめて有意義な示唆をもたらすはずである。

生態人類学的アプローチの有効性を述べたが、いくつかの短所も指摘しなければならないであろう。最大の問題点として、ひとつの事例あたりにかける調査時間が長くなることにより、調査事例数が限られてしまうことが挙げられる。また、直接観察に基づく客観的な記述を心がけたとしても、やはり観察者が現場で情報を取捨選択することがあり、調査者個人の属性や能力の差異による記述のぶれが生じないともかぎらない。さらに、長期参与観察の過程において、対象者の生活に影響を及ぼすというバイアスが考えられる。このほか、政治的に参与観察を実施しづらい状況にある国や地域もあるであろう。障害の種別によっては、準備に時間もかかるかもしれない。たとえば、ろう者の調査をする場合には、調査者も当該集団の手話言語を自ら学習して身に付ける必要がある（亀井[2006]）。

このようなとき、自らも障害をもつ研究者による参与観察を振興することができれば、非障害者による調査とは異なる視角と技法による新しい成果が生まれる可能性が高いであろう（序章（森）参照）。類似した身体機能や経験、言語を背景に、調査対象者と対等に近い立場で調査ができることの意義は、きわめて大きいものと考えられるからである。そのためには、障害をもつ人の高等教育進学や研究活動参加、海外調査遂行などをいっそう促進するための長期的な取り組みが必要となる。

第6節 おわりに：複数の調査法の共同作業

参与観察と計量的手法を旨とする生態人類学は、障害者の生計の実態把握と望ましい開発企図のための有益な手法を提供するであろう。時間がかかるなどの調査法の欠点を補うためには、他の調査法との共同作業を行うという

対案が考えられる。参与観察で得られた成果をもとに質問紙調査を行い、そこですくいとれないことを再び参与観察で検証するなど、複数の調査法の間でフィードバックが行える形があれば望ましいであろう。

本論で例示したアフリカ諸国のろう者のケースであれば、多言語社会であることを念頭に「ふだん話している手話言語の種類」「学習経験のある書記言語の種類」「職場の言語環境」など、言語・文化に関わる調査項目が質問紙に盛り込まれれば、生計や就労に関わる重要な要因を幅広く把握することにつながるかもしれない。他の種別の障害をもつ人たちにおいても、このような参与観察と質問紙の間で相互にフィードバックが行われることの意義は大きいであろう。

障害の社会モデルに基づいた開発研究という新しい分野の成立にあたり、その枠組みに適合した効力のある調査法の開発とデータの収集は急務である。その際に研究者は、複雑きわまりない社会環境を調査対象にすることの現実的な困難さを引き受け、それへの有効な対処法を検討する必要があるであろう。生態人類学的アプローチの応用可能性を現場で試してみることの意義は、大きいものと考えられる。

謝辞

戸田美佳子氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）より、カメルーン共和国に関する統計資料の提供をいただきました。

[参考文献]

<日本語文献>

秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編 [1995] 『生態人類学を学ぶ人のために』
世界思想社。

石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編 [1994]
『文化人類学事典』弘文堂。

- 今西錦司 [1948] 『遊牧論その他』 秋田屋。
- 伊谷純一郎・原子令三編 [1977] 『人類の自然誌』 雄山閣。
- 梅棹忠夫 [1955] 「草刈るモンゴル」 『遊牧民族の研究』 自然史学会。
- 亀井伸孝 [2008] 「ろう者における人間開発の基本モデル: アフリカのろう教育形成史の事例」 森壮也編 [2008] 201-228。
- 亀井伸孝 [2006] 『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』 明石書店。
- 亀井伸孝 [2002] 「狩猟採集民バカにおけるこどもの日常活動と社会化過程に関する人類学的研究」 京都大学博士学位論文。
- 亀井伸孝 [2001] 「狩猟採集民バカにおけるこどもの遊び」 市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界 (講座・生態人類学 2)』 京都大学学術出版会, 93-139。
- 国連開発計画 [2004] 『人間開発報告書 2004: この多様な世界で文化の自由を』 国際協力出版会。
- 田中二郎 [1971] 「ブッシュマン: 生態人類学的研究」 東京: 思索社。
- 内藤順子 [2008] 「『途上国』の相手に教える: チリにおける開発援助の現場から」 武田丈・亀井伸孝編 [2008] 『アクション別フィールドワーク入門』 世界思想社, 112-124。
- 内藤順子 [2003] 「リハビリテーションは誰のために」 関一敏・西村明共編『共生社会学論叢 I 内と外』 九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座, 46-54。
- ノラン, リオール [2007] 関根久雄・玉置泰明・鈴木紀・角田宇子訳『開発人類学: 基本と実践』 古今書院。
- 森壮也編 [2008] 『障害と開発: 途上国の障害当事者と社会』 日本貿易振興機構アジア経済研究所。

<外国語文献>

- Kamei, Nobutaka [2005] Play among Baka children in Cameroon. In: Hewlett, Barry

S. and Michael E. Lamb eds. *Hunter-gatherer childhoods: Evolutionary, developmental & cultural perspectives*, New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 343-359.

Ministère des Affaires Sociales, République du Cameroun [2006] *Plan d'action national pour la promotion des personnes handicapées*, Yaoundé.

表 生態人類学と社会モデルに基づく障害研究の比較

それぞれの研究の成立背景や関連分野はまったく異なりながらも、複雑きわまりない環境要因の分析に取り組むことで、特定の人間（集団）における固有の生活様態を明らかにし、そこから問題解決のための示唆を得ようとする点で、両者はきわめてよく似ている。

分野	生態人類学	社会モデルに基づく障害研究
研究の目的	人間集団と自然環境の関わりを明らかにする。	障害をもつ個人または人間集団と社会環境の関わりを明らかにする。
おもな対象	自然環境の中で生活を営む伝統的な人間集団（狩猟採集民、牧畜民、農耕民、漁労民など）。人びとのみならず、それを取り巻く環境自体も研究の対象となる。	社会環境の中で生活を営む障害をもつ個人や人間集団（視覚障害者、聴覚障害者、肢体障害者、精神障害者など）。人びとのみならず、それを取り巻く環境自体も研究の対象となる。
利用される資源	動物、植物などの自然資源	医学／工学的支援技術、知識・情報、制度・政策、資金、人間関係などを含む社会資源
分野の仮想論敵	進化主義的な歴史観における「未開」観。自然環境の中で暮らす人間集団の文化を人類の原初的段階のそれと位置付け、やがて高次の文化により取って替わられるであろう過渡的状态と見なす。	障害の医療モデルにおける「能力の欠損者」観。障害をもつ個人の内部に障害の要因を見だし、やがて治療によって能力の回復を期すべき存在と見なす。

分野の新しさと意義	進化主義的な歴史観において「未開段階」と位置づけられてきた人間集団における生業文化と資源利用のあり方を明らかにすることで、その固有の生活様態に光を当てる。集団の文化自体の進化のプロセスよりも、その集団と取り巻く環境との関わりを重視する。その結果、人類と自然環境の関係に関する普遍的な知見を得たり、その成果に基づいた問題解決（環境政策立案など）を図ったりすることができる。	障害の医療モデルにおいて「能力の欠損者」と位置づけられてきた個人や人間集団の生活文化と資源利用のあり方を明らかにすることで、その固有の生活様態に光を当てる。個人の内部の障害要因の除去よりも、その個人・集団と取り巻く環境との関わりを重視する。その結果、人類と社会環境の関係に関する普遍的な知見を得たり、その成果に基づいた問題解決（ユニバーサル・デザインなど）を図ったりすることができる。
研究の困難さ	複雑きわまりない多様な要因をそなえている自然環境の中で、どの要素がその人間集団にとって重要／有用な資源となるかを見極めることが難しい。	複雑きわまりない多様な要因をそなえている社会環境の中で、どの要素がその個人または人間集団にとって重要／有用な資源であり、どの要素が障壁をもたらしているかを見極めることが難しい。
研究の背景	生態学、霊長類学、文化人類学	社会学、障害者権利運動
最近のトピック	グローバル化、文化変容、環境破壊、伝統的資源利用と市場経済の関係。開発研究や経済学との接近。	障害者権利条約、途上国の障害者、障害と貧困。開発研究や経済学との接近。
有効なアプローチ	参与観察、直接観察に基づく計量的手法	?（今後の課題）